

トラック 303~307：コモロ人研究者へのインタビュー（INALCO）

—— 興味深いかどうかは確かではないけれど、まだ見ていないので…

それじゃ、USB を持っているならそれに全部入れてあげよう。今 USB を持っているかい？

—— 残念ながら今日は持ってこなかったんです。でも後でやり取りできます。

幾つかの雑誌については pdf 形式で持っているからあなたにあげよう。私はそのこと [コモロの歴史] についていやほど話してきたけれど、読む方が簡単だろうと思う。

—— とにかく私たちはグランド・コモロ、つまりンガジジャの人々にしか会っていないけれど、彼らが [物語を指す言葉を] 区別していることがわかりました。

それはとても重要なことなんだ。

—— 実際、物語を指すには幾つかの言葉があって、しかもそれらが全部ひとくくりにされているようでした。

アンジュアンやマヨットやモエリでは物語の最後に用いる表現が幾つかあって、どれもが同じ「物語」を指している。但し逆に、同じ語が伝説や歴史を指すこともあるので注意しなくてはならない。同じ一つの語が、歴史や物語や、さらには語るという事実そのものを指す場合もある。例えば、ちょうど最後に「私は語り終えた」という表現があったとすれば、それは「伝説」であることを意味している。つまり、「これは伝説である」ということで物語ではないということになる。それに、民話というのは別の世界だから、語り手、特に優れた語り手はその世界、つまり見えない世界、過去の世界に身を置いている。そして、語り終わった時にそれらの世界を離れて、ここに戻って来るというわけだ。

—— なるほどよくわかります。

そこで、大ざっぱに言えば最初の問題は、語り手に「私はハレ [所謂フィクションの物語] を聴きたい」ということだ。もし、「私はハディシ [所謂、ノンフィクションの話] を聴きたい」と言えば、まったく違うことになる。そして「ハレ」の方がコモロ諸島全体で、アンジュアン島でも、通じている。

—— それでも、その語 [の使い方] には違いがあるという印象を持っています。間違っているのかも知れませんが、私が会った人たちの間では、ハレはハディシよりも多く話されています。それからは私は [ジャンル] の包括化はしていません。

彼らは最早それらを知らないということがあがるが、他の理由もある。私の調査によれば、グランド・コ

モロ島、アンジュアン島、モエリ島、それらのいずれの島でも、民話についての知識を示せば示すほど、現代的な人間ではないと見られてしまうことを人々は心配するようになる。それで人々は「そういうものは知らないよ」と互いに言う。知っているなんて言ってしまうと、懐古趣味の古い人間に分類されてしまう。だから今では、民話を知っている人たちでもこう言うんだ：「ああ、忘れてしまったよ。そういうものは知らない」。彼らは自分がその種の「懐古趣味の」人間に分類されたくないんだよ。

—— でも、それはどうしてですか？

とても単純な理由だ。

—— 単にそういうカテゴリーに分類されることを何故そんなに心配するのですか？ 恥ずかしいことは何もないのに。

それはまさに文化的な動きなのであって、民話の次元の話だけではない。もっと簡単に言えば、あなたがこの所謂「現代の」文化にいる時、無意識であれ、意識的にであれ、自分がフランスにいて、それらの物語とは関係がないと思っており、そこには一種のギャップがある。だからその結果、あなたはそれを排除することになる。私は同じ問題の逆パターンに出逢ったことがある。私の村にはジンの土地だと信じられている土地があった。村の人は誰もその土地に家を建てようとはしなかった。そこにいる人々にとってはだめだったわけだ。ところがフランスにいる移住者がやってきて、家を建てるという禁忌のものともしかなかった。これはまったく逆の話になる。彼はフランスにいて、開かれた現代的精神を持ち、過去に捉われておらず、そこからやって来て、敢えて件の土地に家を建てようとする。しかし、もし彼がここに住んでいるなら、誰も昔の何かについて話すよう彼に頼みはしない。彼はそれらの物語なんか知らないからだ。だから、逆のパターンもあり得る。あなたがあちらにいて、ローカルで、多かれ少なかれローカルなことをしていても、ここに来れば、意識的／無意識的を問わず、あなたは変わってしまう。だからおわかりだと思うが、この民話、ここで民話を語る人たちも変わってしまう。私はボディーガードや警察が出てくる民話を知っているよ。

—— それはかなり違いますね。

そういうものはいつも存在しているがローカルな文化の影響というのも見られる。あちらにいる人たちに関してはとてつもなく影響されているので、彼らが影響されていないなんてとても言えない。何しろ、民話の中に銃やらカラシニコフが出てくるんだから最悪だ。だから、ここで民話を語る人を見つけるといのはとても難しい。

—— 実際、とても難しいでしょうね。私としてはわかったような気がします。

この人たちで半分までしか話さない人たちがいた。彼らは私にこう言ったよ：「もうやめましょう、こんな物語は」。だから、話は中途半端になって続きがわからない。[民話を語る人は] いるにはいるのだ

けれど...

—— 後が大変ということですね。

フランスに40年住んでいる人がいて、彼はコモロには1回か2回しか帰ったことがない。彼がここで語る[民話の]バージョンというのが、コモロで40年前に語られていたバージョンなんだ。彼はフランスに来た時、その同じバージョンを覚えていたことになる。その40年の間にコモロではそのバージョンは1000回も変わったよ。だから、その二つのバージョンを比較することはとても重要になる。彼は40年前に国を出て、ただひとつの民話を語り、その同じ民話がコモロでは1000回も進化したのに、彼は自分が40年前に聞いて覚えたことをずっと留めておいたということになる。彼はディアスポラ[移民]のひとりだから、その分だけより継承者であると言える。彼らは色々な事物を保存する。というのも、彼らは結局は、自分たちの文化と切り離されたくないからだ。だから彼らは受け入れたものを保存する。そして、それは民話でも他の事物でも同じことなんだ。

—— 私は歴史的な次元も非常に重要だと思いました。私が人々に物語を語るよう依頼するといつも、しかも「ハレ[フィクションの物語]をお願いします」と最初に断ったとしても、人々はスルタンの歴史を語ることに執着するのです。そういう人に何度も会ってきましたが、しかも話のバージョンが異なっていて、それは話にどっちつかずの人がいるからなのです。あなたは民話を採話する時、そういう印象を持ちませんでしたか？ 彼らはとにかく歴史、それもコモロの歴史を語ろうとするのです。同じことを確認しませんでしたか？

いや、まったくなかった。理由は簡単だよ。実際には、大まかに言うと、体系的ではないにしろ、[語り手の性別という]違いがあるということだ。つまり、男性に民話を語ってもらおうとするのと、女性に民話を語ってもらおうとするのは、同じことではないんだ。男性の方が...

—— 女性が男性に頼んだ時と、男性が男性に頼んだ時？

いやいや、あなたが誰かに民話を語るよう頼んだ時、それが男性だったら歴史を語る傾向にあるということだ。

—— そう、しかも長く。

長い歴史、或いはアラブの民話、そんなところだね。一方、女性の方とは言えば、よりローカルな物語になる。多分「ローカル」という語ではないにしろ。より正確に言えば、彼女たちに[話すように]頼んだことから彼女たちは拡散してしまう。それらの民話にはアフリカ的なものが出てこない。別の説明の仕方がある。もし民話を採話したければ、もう男性よりも女性に頼まなければならない。

—— でも見つけれませんでした。

それは専ら女性の仕事なんだ。コモロの民話が伝承されるのは、男性に禁じられているわけではないけれど、通常は女性が語る。男性に受け継がれれば何かしら変わってしまう。それ〔語り手の性別の違い〕がまずひとつめ。二つ目として、彼らがコモロの歴史を語るのは、インフォーマント、もしくはインフォーマントの見方が反映しているということであり、それは彼らがあなたはコモロ人ではなく、従ってコモロの歴史を知らないと判断し、それであなたに歴史を語り始めるということなのだ。

—— ええ、でも私は自己紹介する時にコモロ語で話したのですが。多分私が若いからかも知れません。

そうだと思うけれど、私の調査ではそんなことは決して起こらなかった。或いは、小田さんのために彼らはコモロの歴史を語ろうとしたのだろう。というのも、シャマンガ氏が頼んだらあなたに歴史を語るとは思わないからだ。私の場合は皆無だ。多分、それはコモロの歴史を語る気になったインフォーマントなんだろう。

—— 多分そうではないかと思います。

コモロ人ではない人間がいるのを見て、彼らはその人に教えようと望んで、そうしたのではないかな。あなたがいったように。彼にコモロの歴史を教えようと。あなたが語る内容をハレに限定した時、何故彼らがスルタンの歴史を語り始めたのか私にはわからない。恐らくなんでもないことだったのだろう。彼らは教えようと思っただけなんだ。

—— みんなそうしました。みんなです。先月と今月6、7人の人に会ったのですが、みんなが歴史を語りました。全員が。

それならあなたがひとりで行けばいい。そうしたら彼らはあなたにスルタンの歴史について語ろうとはしないだろう。なぜなら、彼らは「この子はコモロ人だからその話はもう知っている」と言うだろう。彼らは小田さんに教えようとしていたのだよ。これで納得がいくかな。

—— 彼らはこう言ってました：「いや、それについては知らないのでは、本当のコモロ人じゃないからね」。

それは変だね。

—— そうです。何しろ私は子供の頃からいましたから。

その時、あなたはコモロ語で話したのかね？

—— はい、コモロ語で話していました。私が〔ハレを語るよう〕頼んだら彼はこう言いました：「とに

かく、君はヌガジジャ出身なんだね」。

それこそ、さっき私が言ったことだ。

—— その時私はわけがわかりませんでした。だって、そういう歴史は私にとっては漠然と覚えているもので語れませんが、[語れるとしたら] むしろイブナシーヤの方でしょう。だから私はとても奇妙で、とてもわかりにくいと思いました。私には理解できないことでした。

それは論理的だよ、まさに論理的。

—— 論理的？ ここで？

さっき私が言ったように、コモロ人は自文化にあってはメンタリティを幾らか表す言い方を用いる。コモロでは果物でさえ二つのカテゴリーに分類されている。例えばマンゴやパパイヤなど。

—— 「外国のマンゴ」と「コモロのマンゴ」ですね。本当に区別している。

外国のパパイヤとコモロのパパイアがあっても外国のパパイヤの方が品質がいい。

—— というのも、[コモロでは] 外国のものは常にいいからですね。

人がもし「ああ、あなたは imannga ですね」と言ったら、コモロではそれは、あなたは...

—— お世辞の一種ですね。

「洗練された」という意味になる。

—— お世辞ですね、本当のところ。

こういうメンタリティ（「imannga というのは洗練されているという意味で、古臭くないということだ」と言うような）を持った連中がここにやって来て、明らかに判断を誤っているわけだ。そのようなメンタリティを持った連中にとって、昔の国の民話に戻るなんてことは、コモロ語への精神的・心理的な回帰に等しい。

—— 無意識的であろうと意識的であろうと。

ところで、「ああ、コモロの民話ならよく知っている」と言うような人を見つけるのは、ここではとても難しい。だから、「ああ、そういうものは私は知らない」と彼らが言ったとしても驚いてはいけない。私

は同じようなケースに遭遇したことがある。他にも、ある人が私にコモロ語で面白い話を語ってくれたのだけれど、それはここで生まれた彼の子供が語ったもので、例えば「白雪姫」といったジャンルだ。つまり、その子供が父親に語るわけで（「あのね、僕はお話を教わったんだけど、こんな感じさ...」）、その父親が後からコモロ語で復元するというわけさ。

—— コモロ語で、ですか？

彼は私には語ろうとしなかったのに、そこでは「子供が語るのを」聞いているということになる。

—— 覚えていないと称しているとか。

つまりそれは、あのコモロに回帰することを拒否するという心理的障壁に他ならない。同時にまた、彼はコモロ性というものも愛しているので、逆説的ではある。

—— そうですね、逆説的だし、それに彼らは「民話を含むコモロ的なるものを」ととても誇りに思っている。彼らは共同体を大切にすし、それをとても誇りに思っている。ここにやって来た大部分の人たちは。

しかし、それは懐古趣味ではないし、過去に対してではない。そういうものは彼らは望んでいない。

—— 実際、矛盾しています。

一方、コモロだったら人々は、多少なりとも「民話を」語ってくれるし、「それじゃスルタンの歴史を話してあげよう」とか「そんな話は知らない」なんてことは言わない。知らないということは、彼が話したくないということなんだ。彼があなたに「知らない」と言おうとしないのは、話してしまいたいからだ。ここだと一体何を話そうというのだろうか。歴史は気に入らないと思う。

—— それから、私はあなたがそういう目に逢ったことはないと思像しますが、ある人たちは「ハレ」を語る時にフランス語で語り始めるんです。そこで私はこう言うわけですが：「いいえ、関心があるのはコモロ語で語ってもらおうということです。何故なら、いずれにしても小田さんが後でそれを訳してくれる人をたくさん知っているのです」。それでも彼はコモロ語で語りたがらない。

そういうことは言語学者に頼めばいい、私は違うけれど。

—— 実はそれが難しいのです。私には理解できなかつたし、やはり複雑なんです。

でも、それは普通でもある。

—— 私には論理的ではないように思えます、結局のところは。

多分、環境というコンテキストがあるのだろう。もし私があなたに外で会ったら、私はフランス語で話すだろう。どうしてか？

—— 私がコモロ人だということが自分の頭にはないから。

違う、あなたがコモロ人だと知っていてもどうかということなんだ。もし私があなたに外で会ったら、私はフランス語で話すことが出来るだろう。どうしてか？

—— フランスにいるから。

それはこういうコンテキストなんだ。つまり、「私はあなたがフランス語を話すことを知っている」「私は自分がフランス語を話すことを知っている」「私はお互いに理解できることを知っている」。逆に、私が自分の母親と向き合ったら、自動的に私はコモロ語で話す。だから、物語を語ろうとする人物は、あなたがフランス語を話すとは知っていれば、フランス語に引きずられるということだ。

—— おまけにそのフランス語がそれほどうまくない、というか大したことのないフランス語なんです。

それは重要ではないよ。

—— それこそつまらないことです。とにかくあなたが〔採話した〕民話を持っていたら情報をお願いします。いずれにしても〔ここで民話を集めるということは〕大変だということは確かなんです。

そう、ここではとても大変だよ。私の例だと、あっち〔コモロ〕ではないが、ひとりの女性がいて彼女は私にとっても面白い、非常に面白い民話を語ってくれた。だいたい前のことだ。それは私が〔民話研究を〕やり始めた最初の頃だった。私はここで言語学を学んでから〔民話研究を〕始めたけれどテキストが必要だった。というのも私は民話を探しに国に戻ることができなかったので誰かを探さなければならなかった。それで彼女を見つけたということだ。彼女は実際、多くの民話を知っていた。でも今では、ここに住んで長くなるのでそれらの物語を忘れていてもあり得る。

—— それは仕方ないでしょう。私だって思い出せないし。

いずれにしてもそれは記憶の歴史でもある。語れば語るほど、それを覚えていられる。20年も放っておけば語れないだろう。ところであなたはいつまでここにいるのかな。

—— 〔小田さんは〕土曜に発ちます。もしかしたら5月の終わりか6月の始めに戻ってきます。

コモロに行くことは考えていないのですか。

(小田) 今年行くとしたらラマダンの時期次第です。

—— [ここでの語りは] 大抵の場合、10分ほど自己紹介があって、内容と言えば、彼がどういう家柄のどういう女性と結婚したか、というものなんです。

もし、民話が入用だったら、今ではないけど、あなたにあげるよ。必要ならば私はくさるほど持っているの。それは私があっちで録音したもので、私は80歳まで生きるとは思えないからね。

—— そんなにたくさんあるのですか？

たくさん録音したよ。というのも、どうしてかわからないけど16年間録り続けた。その頃博士号はまだなかったけれど、民話を録音し、民話を録音し、民話を録音した。だからあなたが少々困っているのなら、モエリ島の民話がほしいなら、私は持っている。但し訳していないし、編集もしていない。もしヌガジジャ島の民話がほしいなら持っている。訳していないし編集もしていない。アンジュアン島は幾らか少ないけれど、というのもそれほど何度も行っていないからだ。その民話は博士論文で使っている。マヨットのものは、知り合いがみんな持っていったので私にはない。ンガジジャ島とモエリ島の民話なら、もしあなたが欲しいなら、手を加えていないテキストをあげることができる。音源だ、未編集の。400編以上の民話がある。ちょっとした仕事だったけど。録音した民話をあなたにあげることができる。まだ分析していないものをね。もし欲しかったら、録音してから書き起こして訳したのもの。

—— それと引き換えに何か...

いや、見返りはいらぬ。

—— 冗談ですよ。

本当に見返りはいらぬ。ただ、勿論仕事をした人間の承認は必要だけれど、少なくともある程度は。私は博士論文の中で、録音して転写して訳した民話を発表したけれど、まだ出版はしていない。だから、使う時には「誰々が採話した」というクレジットを入れて欲しい。